様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２３ 日現在

機関番号：３３５０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３７０１４３

研究課題名（和文）朝鮮美術展覧会の工芸部新設と郷土性議論

研究課題名（英文）The establishment of the crafts section and the argument on Folk in the Korean Art Exhibitions

研究代表者
李　尚珍（LEE, SANGJIN）

山梨英和大学・人間文化学部・准教授

研究者番号：００５１５３４８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：１）朝鮮人は日本の朝鮮美術展覧会創設の目的が、植民地統治政策であることを知りながらも、展覧会・展示の自己アピールの舞台を芸術創作活動における近代化表象の空間として受け入れたことを明らかにした。２）工芸部新設と郷土性議論の背景には、在朝鮮日本人浅川伯教と白樺派柳宗悦の活動による「工芸ブーム」が影響を与え、自然等の朝鮮の固有性の表現として「郷土」概念が定着していったことを明らかにした。３）「郷土」概念は日本の文壇を経て、日本留学経験の朝鮮の若者らによって朝鮮に伝わり、さらに彼らが朝鮮美術展覧会活動を通して、社会と民衆に対して朝鮮の「個性」と「固有性」への尊重のメッセージを広めたことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：I disclose the background for the establishment of the Korean Art Exhibitions, and analyzed how did the western ‘art’ concept influence Korean society and Korean art world during the Japanese colonial period. By analyzing the background for the establishment of the ‘crafts section’ and the argument on ‘Folk’, I clarified the influence of the actions by Asakawa Noritaka and Yanagi Muneyoshi. Asakawa and Yanagi found the National Folk Museum of Korea in the 1920s, and by that, a ‘crafts fad’ was arising in both, Japan and Korea.
I elucidated that the ‘Folk’ concept that came from Germany during the late 19th century, was initiatively brought to Korea by young Koreans who studied modern western culture in Japan through the Japanese literary world.Particularly through their artistic activities at the Korean Art Exhibitions, these young Koreans spread their message, to be aware of and respect their Korean ‘personality’ and ‘identity’, to the Koran society and people.

研究分野：人文学

キーワード：朝鮮美術展覧会　工芸　郷土性　美術　植民統治期　日本留学生　柳宗悦　浅川伯教

１．研究開始当初の背景

朝鮮総督府主導の朝鮮美術展覧会（以下、朝鮮美展という。）の開催は、朝鮮の若い美術家たちに対しては実力発揮の絶好の機会を与え、朝鮮民衆に対しては社会的・文化的啓蒙のチャンスを与えた。そして、朝鮮社会にとっては、誰もが自由に「芸術力及び専門力」を発揮できる近代化の象徴となった。

しかし、朝鮮美展の開催は総督府による文化活動の「支援」と文化政治の「政策」という二重構造を持っていた。1919 年 3 月 1 日の朝鮮独立運動後、総督府は朝鮮民衆の意識改造という文化政治、すなわち植民統治権力の正当化と日本への同化のために文化・芸術領域の統制及び管理を強化し、具体的かつ視覚的プロパガンダとして展覧会を開催することによって、その伝達力と波及効果を図ったのである。私は朝鮮美展のもたらす朝鮮社会への影響について、朝鮮民衆は芸術力・専門力を発揮でき、日本人は朝鮮民衆の力量の評価をすることができたのではないかと考えている。その理由として次の 2 点を挙げる。

第 1 点は、「工芸部」新設を通してそれまでに評価されなかった朝鮮の伝統芸術文化の独自性が認められるようになったことである。第 2 点は、作品をめぐる「郷土性」議論が台頭したことである。私は上記の見解を 3 つの学会で発表し（①2010 年の第 61 回朝鮮学会研究発表「浅川伯教と朝鮮美術展覧会」、②2011 年の韓国の東アジア日本学会論文発表「朝鮮美術展覧会の実相に関する一考察―新聞報道を手がかりにして―」（『日本文化研究』第 40 集）、③2013 年の第 64 回朝鮮学会研究発表「朝鮮美術展覧会における『工芸部』と『郷土性』」、この研究テーマが今後大きく展開していく可能性を改めて実感した。

２．研究の目的

本研究の目的は、以下の 3 点を明らかにすることであった。

第 1 は、朝鮮美展が近代化の過程にあった朝鮮美術界に与えた影響について明らかにすること。第 2 は、「工芸部」新設（1933 年）が日本人の「朝鮮観」と朝鮮人の「美術観」に与えた影響を明らかにすること。第 3 は、「工芸部」新設によって日本人審査員たちと朝鮮人作家たちの「郷土性」議論（郷土＝地方＝朝鮮）にもたらした影響を明らかにすること。

この 3 点を究明することによって、「美術」と「工芸」がもたらした植民統治期における社会変化と近代化という論者の独自の視点と調査から、朝鮮美展が体制的プロパガンダというマイナスイメージとは別に、朝鮮社会にどのようなプラスイメージをもたらしたかを明らかにすることが期待できる。

３．研究の方法

１）関連資料の収集とその分析

韓国発行の朝鮮美展に関係する新聞記事の詳細な分析を行った。
これまではこのような一次資料の調査がほとんどされず、①展覧会の実相、②美術界の動向、③民衆の反応に関する分析はほとんど行われてこなかった。私は、『東亜日報』『朝鮮日報』『京城日報』『毎日申報』を調べて展覧会関連記事の分析を進めた。

２）新たな一次資料の発掘と調査分析

2014 年度の特別企画展覧会『東京・ソウル・台北・長春―官展にみる近代美術』と 2015 年度の特別企画展覧会『日韓近代美術家のまなざし―「朝鮮」で描く』において公開された朝鮮美展の出品作品とそれに関する評論を分析し、作品からみる朝鮮美展の「郷土性」についてより深く考察を行った。そして、『朝鮮美術展覧会図録』の分析を行い、韓国人作家と日本人作家がそれぞれ表現しようとした「郷土性」の真相を探り、作家別・時代別の特質を明確にした。

３）柳宗悦と浅川伯教・巧兄弟研究者並びに美術史研究者からの聞き取り調査

展覧会の各担当学芸員のインタビューから得た情報と、柳宗悦と浅川伯教・巧兄弟研究者並びに美術史研究者からの聞き取り調査を通して、当時の朝鮮美展の様子をより明確に考察することができた。このような分析内容を積極的に学会で発表し、より客観的な考察ができた。

以上の方法を通して朝鮮美展の朝鮮人作家と日本人作家の作風を分析しながら、その表現における「郷土性」が過去・後進性を表す前近代的なものであるのか、あるいは現在・先進性を表す近代的なものであるのかについて考察することができた。それは、明確に分かれるものではなく「継承」というキーワードで過去と現在をつなぐものであった。

４．研究成果

本研究の大きなテーマである「朝鮮美術展覧会」の創設背景とその影響について考察していくなか、西洋の概念としての「美術」が朝鮮社会に浸透し、その「美術」の表現方法として「郷土性」が抽象的表現ではなく、自然や風景を具体的に描写するリアリズムによって表現されていったことを明らかにした。朝鮮美展が開催された時期は、「郷土性」概念が西洋画受容の混乱期を乗り越えて純粋な芸術領域の美術論として定着した時代であり、「郷土」＝朝鮮の個性・固有性の概念が認められ、朝鮮における純粋美術が発展していく可能性が潜在していたと言える。

具体的に、2014 年度には、朝鮮美展の創設背景とその影響について考察し、西洋の概念としての「美術」が日本による植民統治期の朝鮮社会と美術界にどのような影響を与えてきたのかを分析する作業が進んだ。

2015 年度には、前年度の研究実績を踏まえ

て、朝鮮美展における「郷土性」とその議論に関する分析を進めることができた。1910 年代に朝鮮で暮らし始めた浅川伯教・巧兄弟と白樺派として活動していた柳宗悦との出会いによって朝鮮美術・工芸を研究対象とする活動が活発になり、1920 年代からは日本と朝鮮に「工芸ブーム」が巻き起こった。彼らの活動は朝鮮美展の作風と審査員の審査基準に影響を与え、美術における「郷土性」表現が強く意識されるようになった。近代化の中に固執されている伝統文化・習慣の表現であるのか、近代化を受け入れたありのままの現状の表現であるのか、その議論は朝鮮人作家、日本人作家、日本人審査員によって対立しているようにみえるが、伝統の「継承」を表象として確立していこうとする意志は共通している。このように朝鮮人作家、日本人作家、日本人審査員の言説を分析することによって、「郷土性」表現の真相とその意義を今後の研究において幅広く考察することができる。

2016 年度には、朝鮮美展と郷土性の関連性について一次資料をもとに分析を進めた。「郷土」概念は、19 世紀末のドイツに由来する概念で、1900 年代の日本の文壇を経て、日本留学で近代西洋文化を学び、帰国した朝鮮の若者らによって朝鮮に伝えられた。そして、彼らは、1920 年代の文学・美術活動を通して社会と民衆に対して朝鮮の「個性」と「固有性」を意識・尊重するメッセージを広めていった。それは、彼らが西洋文化に触れることによって新しい情報や作風に影響を受け、自国「朝鮮」について、制作者として自己の表現方法の確立を図っていたから実現できたことである。その中、1921 年に朝鮮美展が開催されることによって、近代文化の領域に美術が明確に位置づけられることとなった。例えば、羅蕙錫、金周経、洪得順らの活動によって、伝統的画題としての「郷土」から他者に影響されずに変わらない・変えられない「生の主体」＝固有性・主体性が美術として確立されて行った。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
李尚珍「朝鮮美術展覧会における「郷土」概念－朝鮮美術展覧会の初期の動向を中心に－」『比較文化研究』第 123 巻、査読有　2016 年、pp.1～12。

李尚珍「植民統治期の朝鮮社会における朝鮮美術展覧会の受容に関する一考察」『比較文化研究』第 118 巻、査読有、2015 年、pp.23～37。

李尚珍「柳宗悦と浅川伯教の「朝鮮美術観」に関する一考察―「朝鮮民族美術館」の設立過程を中心に―」『比較文化研究』第 116 巻、査読有、2015 年、pp.55～68。

〔学会発表〕（計８件）
１）李尚珍「朝鮮美術展覧会と郷土性」朝鮮学会第 67 回全国大会、2016 年 10 月 2 日（日）、於、天理大学（奈良県天理市）

２）李尚珍「朝鮮美術展覧会と表象―作品における「郷土色」表現を中心に―」日本比較文化学会第 38 回全国大会、2016 年 5 月 21 日（土）於、弘前学院大学（青森県弘前市）

３）李尚珍「朝鮮美術展覧会における「工芸部」と「郷土色」に関する一考察」韓国日本研究総聯合会（韓国日本文化学会所属）第 5 回国際学術大会・シンポジウム、2016 年 4 月 16 日（土）於、釜山外国語大学（韓国釜山市）

４）李尚珍「朝鮮美術展覧会における「郷土色」に関する一考察」日本比較文化学会第 43 回関東支部例会、2016 年 3 月 19 日（土）、於、東京未来大学（東京都足立区）

５）李尚珍「朝鮮美術展覧会における「郷土色」議論に関する一考察」韓国日本文化学会 2015 年 10 月 24 日（土）、於、清州大学（韓国忠清北道清州市）

６）李尚珍「柳宗悦の朝鮮認識―初期の活動を中心に―」朝鮮学会第 66 回全国大会 2015 年 10 月 4 日（日）、於、天理大学（奈良県天理市）

７）李尚珍「朝鮮美術展覧会に関する一考察―本展覧会は植民統治期の朝鮮社会にどのように受容されたか―」日本比較文化学会第 37 回全国大会、2015 年 6 月 13 日（土）於、創価大学（東京都八王子市）

８）李尚珍「日本人の「朝鮮美論」に関する一考察―植民地期における柳宗悦と浅川伯教の「朝鮮美論」の比較を中心に―」日本比較文化学会、第 36 回全国大会、2014 年 6 月 14 日（土）於、北九州国際会議場（福岡県北九州市小倉北区）

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
なし

６．研究組織
(1)研究代表者
李尚珍（LEE SangJin）
山梨英和大学・人間文化学部・准教授
研究者番号：00515348

(2)研究分担者
なし（　　）
研究者番号：

(3)連携研究者
なし（　　）
研究者番号：

(4)研究協力者
なし（　　）